審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

イタリアの芸術家ブルーノ・ムナーリ（Bruno Munari）の子どものための造形表現教育，特に触覚に注目した教育を主たる研究対象としている。この研究ではムナーリの「触覚のワークショップ」に着目し，ムナーリの教育を通じて保育者が創造的な教育実践への視点を広げる手がかりを得ることを目的としている。本研究では 0～6 歳児の幼児を対象としている。

ムナーリは芸術家、デザイナー、著作家など多様な分野で活躍し日本にも滝口修造らによって 1950 年代に紹介されているが美術教育の分野では，1985 年に東京でワークショップが行われるなど一部では知られていたが一般的とは言えない。本研究は日本に紹介されていないイタリア語の原書を丁寧に当たりムナーリの教育の本質に迫ったものである。さらに芸術家であるムナーリの教育がデューイ、モンテッソーリ、ピアジェなどの影響を受けていることを明らかにしている。また，幼児教育においては，芸術家であるムナーリのワークショップから特に触覚に着目して乳幼児に対する教育のあり方について解明を試みている。研究手法についても国内外の多くの文献調査，これまでほとんど関係性が述べられていなかったレッジョ・エミリアの現地調査，レッジョ・アプローチを行っている保育園等へのインタビュー調査等多岐にわたっている。以上のように本研究は多彩な才能を持つムナーリを橋渡しとして美術教育，幼児教育をつなげて論じた点において独創的であり，なおかつ創造性を伸ばす教育を追求するという意味でも社会に貢献できその意義はきわめて大きいと考えられる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究はイタリア語原書及び日本国内の研究論文，参考図書等を対象とする文献調査，現地調査，インタビュー調査の多岐にわたっている。教育分野のムナーリを扱う研究論文は日本ではきわめて少なく原書の調査が中心となっている。先行研究を丁寧に当たりムナーリの教育について調査をしている。また造形教育の中で特に触覚に焦点を当て，保育と触覚に関わる造形表現との関係性について，文献調査，保育園等へのインタビュー調査，乳幼児発達親子教室の実践研究を行い，論として説得力を持たせている。さらにイタリアの幼児教育においてすでに評価の高いレッジョ・エミリアについても現地調査を行いながらムナーリとの関連性を確認している。これらの研究方法は美術教育，幼児教育の分野においてきわめて妥当ということができる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

ムナーリの教育に関する国内外の研究資料について独自のリストを作成し研究に当たっているなど丁寧な研究手法をとっている。イタリアの先行研究の例では例えば，G.コムニアンがムナーリのワークショップにみる欧米のアクティブラーニングの伝統からの影響、ムナーリによるレッジョへの影響を指摘していること，N.アルトモンテがムナーリの教育にみるデューイ、モンテッソーリ、ピアジェ、およびフレイレの影響を受けた「教育協力運動」MCE など同時代の教育運動による影響を指摘していることなど丹念に調べている。レッジョ・エミリアとムナーリとの関係については現地調査を行い，ムナーリのワークショップ関係者がレッジョで教師の研修を行っていること，ムナーリの子アルベルトがピアジェとの関係性を持った認識論学者としてレッジョと共同研究を行っている等を明らかにしている。日本におけるレッジョ・アプローチとの調査比較

ではレッジョ・アプローチに深い関心をもつ国内の保育園等 5 園から、イタリアの幼児教育との関係および触覚に注目した造形表現活動についてヒアリングを行っている。乳幼児親子教室では自らがファシリテーターとなり，実践的な調査を行っている。ここで見られるように理論面実践面から多角的に調査及び分析を行っている。

（4）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

本研究では，ムナーリの教育活動について「触覚に関するワークショップ」を中心に彼の芸術家，デザイナーとしての経歴，教育についての考え方，交流関係などを文献や関係者からの聞き取りにより考察を加えている。また，レッジョ・アプローチを行っている保育園等からもオンラインではあるが直接聞き取りを行い，さらに，申請者自身がファシリテーターを務めた乳幼児発達親子教室での，実践的な面での考察を加えている。これらの考察からムナーリの触覚のワークショップが、イタリア未来派芸術運動におけるマリネッティの「触覚主義」から影響を受けていること、ムナーリのワークショップのねらいは、造形表現活動の意義が探求と表現のプロセスにあること，また触覚については、子どものための教育活動とマリネッティに影響を受けた芸術における触覚主義の融合によるものであることを示している。これらを示した上で，ムナーリの教育とは，ワークショップを中心に造形表現を通じた幼児の能動的な学びの環境を作り，体験を通じて生まれる発想を表出する表現方法を伝え，子どもの創造性を尊重し育む実践手法であること，特に「触覚のワークショップ」はイタリア未来派芸術運動においてマリネッティから影響を受け，モンテッソーリの触覚への注目が間接的に影響を与えた可能性を確認したこと，ムナーリの触覚教育は視覚以外の諸感覚，特に乳幼児にとって大切な触覚に注目し直接的体験を通じて能動的な学びを創造性の発達へと結びつける手がかりであること，ムナーリの教育を参照することで，多様な触覚の体験から幼児がどのような探究と発見のプロセスを体験しているかを教育者が見つめるところに，ムナーリが目指した子どもの能動的な学びのあり方を深く考える手がかりがあると考えられることを導き出している。これらは美術教育，幼児教育の両学問分野においてきわめて貴重な内容であり，学術的な水準も博士論文として十分である。

（5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

申請者の論文は以上の点から，取得学位にふさわしい意義や成果が認められると判断できる。